

カフカにおけるカイン像

河中正彦

目次

- A) カフカと『聖書』読解
- B) カフカのカイン像
- C) カフカの『兄弟殺し』

A) カフカの聖書解読

- a) カフカはユングボルン (ハルツ) の自然療法サナトリウムに滞在中 (1912年7月8~27日)、ヒツァー(Hitzer)という土地測量士から『聖書』をもらう。(F 131, T 1044)

この聖書は、ルター訳の聖書で1892年版。(cf. Rohde S.29~31)

- b) 1916年6月19日からメモをとりながら聖書を読む。

Franz Kafka: Kritische Ausgabe. Tagebücher S.789 Zeile 13~14

Die Bevorzugung Kains

den er durch die Ansprache noch reizt

(原文にはコンマ、ピリオドなし)

「主は話し掛けることによってさらに怒らせたカインを優遇する」

- c) カフカのテキストの改竄の歴史

- 1) **Hulda Göhler**: Franz Kafkas 'Prozeß' in der Sicht seiner Selbstaussagen.

In <Theologische Zeitschrift, 22. Band, 1966.> S.418. Anmerkung 4.

Der Tagebuchtext: «Die Bevorzugung Kains, den er durch die Ansprache noch reizt», ergibt keinen Sinn, Einfügung von Abels, die ich vornahm, bekommt das Zitat den Sinn der alttestamentlichen Geschichte. Vielleicht liegt hier im Manuskript eine Auslassung Kafkas vor.

‘Die Bevorzugung (Abels); Kain, den er durch die Ansprache noch reizt.’

- 2) **Hans Walter**: Franz Kafka — Die Forderung der Transzendenz. Bouvier. 1977. S.54.

‘Die Bevorzugung Abels; Kain, den er durch die Ansprache noch reizt.’

- 3) Franz Kafka: Kritische Ausgabe. Tagebücher Kommentarband S.194
 «Nicht Kain, Abel wurde bevorzugt», Vgl I. Mose 4. 3~16
- 4) **Bertram Rohde**: «und blätterte ein wenig in der Bibel»— Studien zu Franz Kafkas
 Bibellektüre und ihren Auswirkung auf sein Werk. Königshausen und
 Neumann. 2002. S.198 < die Bevorzugung Abels >

私の仮説 1) カフカが「優遇」を見た箇所を、主なる神がカインのではなく、アベルの捧げものを選んだところに関係付けると、ゲーラーの訂正は正しいことになる。

しかしアベルを殺したカインが、神に死罪をもって罰される代わりに、ただ追放され、しかもその際、「彼を見つけたものが、彼を殺さないように」、カインの印を与えられたことにカフカに記述を関係付けるなら、優遇されているのはカインだということになる。後者の解釈を支持するのは、後に示すように、カフカのカイン解釈が、専らその「印」に集中していることである。

2) フルダ・ゲーラーのやっていることは、「規範化」(Normalisierung)である。しかし誰でもこれは認めるであろうが、テキストは余程のことがない限り、改変しないで、書かれている通りを受け入れて、その解釈が不可能かどうか、極限まで試みなければならない。規範化とは何かを説明するために、ひとつのエピソードを語ろう。(どこで読んだか忘れたので、引用箇所を明示できないが、有名な話なので、ご存知のかたも多いと思う。)ある小学校の先生(女性だったと記憶している)が、生徒の作文を添削していた。ある生徒が、「ウサギの耳は赤い」という文章を書いていた。それを読んだ件の女教師は、「耳」を「目」と訂正した、というのである。この先生の添削は正しかったであろうか？正しかったに違いない。しかし「ウサギの眼は赤い」という文章を書くには、現実との生きた接触は不要である。「ウサギの眼が赤い」ことなど、誰でも知っている。しかし「ウサギの耳は赤い」という文を書くためには、生き生きとした現実との接触がなくては不可能である。しかしブッキッシュ(知識を専ら本から得ている)な感性には、この逸脱が許せない。

ウサギの体で赤いのは、眼であって、耳であってならないのだ。こうして一生徒の「ウサギの耳は赤い」という、レトリックとしても独創的であり、生き生きとした現実との接触から生まれ、またそこから受けた衝撃をも伝達している一文は、「先生」の無慈悲な秩序の感性によって圧殺された。

フルダ・ゲーラーがやっていることは、この馬鹿げた「先生」のやっていることと全く同じことである。カフカは「カインの優遇」と書いた。これは通りが悪い。その点では、「ウサギの耳は赤い」という文章と同然である。しかし「ウサギの耳は赤い」が、現実から受けた衝撃を生々しく伝えているように、カフカの「カインの優遇」という定式化には、旧約聖書を初めて克明に読んだカフカが受けた激しい衝撃が歴然としている。なぜ兄弟を殺したカインは、死罪になるのでもなく、およそいかなる罰を受けるのでもなく、「彼を見つけたものが、彼を殺さないように」神から「カインの印」を受けられることができるのか？この裁きは不当なのではないか？カフカの心にはそういった疑念がとぐろを巻いていたはずである。神とはなにか、旧約の神とは一体どのような神なのか？疑問はそこまで達したであろう。しかるにゲーラーは、「アベルの優遇」と訂正する。こんなありきたりを書くためなら、聖書を読む必要は全くない。テキストを自分の知性の身の丈に切り刻む「プロクルステスの寝台」的な愚行を、改竄とおわずに何と呼ぶべきなのか？

しかしこの改竄が一旦固定されてしまうと、ハンス・ヴァルアーがこれを引き継ぎ、「批判版全集」の注釈者が、これに倣い、ベルトラム・ローデも無批判に受け入れ、だれももう一度旧約聖書の原点に立ち戻ってカフカの覚書を理解しようとはしない。このような伝聞で定説は、覆しがたい重みをつけていく。口の悪いクリストフ・シュテルツルは、このような参考文献の堆積を「ボタ山」(Christoph Stölzl: Kafkas boses Bohmen. Text + edition, 1975. S.136)と呼んだが、言いえて妙としかいいようがない。「カフカ文献」は、このような無意味な堆積でできている。カフカ研究は Legende (聖人伝説) で出来ている。Gerhard Neumann の有名な < Gleitendes Paradox > (DVjS Bd.42, 1968. S.702-744) もしかり、それに劣らぬ有名な Jörgen Kobs の < paradoxer Zirkel > (Jörgen Kobs: Kafk.

Athenäum 197, S.7-19)もまたしかりである。こういうことに精通していることが、カフカに精通していることと勘違いされているが、これは全くの誤解でしかない。「ボタ山」を掘ってもなにもでてこない。カフカ文学の素肌に触れることが重要である。それにはカフカが触れた作品に自分で触れなおしてみるのが、不可欠なのだ。

d) アベルとカインの神話の解釈

山形孝夫『聖書の起源』（講談社現代新書 448）p.18～24

カインは単なる「農民」ではなく、農耕民一般の象徴。アベルも遊牧民の象徴。

メソポタミア神話 — 女神イナンナの「夫選び」のモチーフが原型。

牧畜神ドゥームジーと農耕神エンキムドゥのうち前者を選ぶ。

（背景に農耕民と遊牧民の幾世紀にもわたる宿怨）

「農耕者カインにたいする告発と断罪は、新しい農耕文化にたいして、微妙に揺れ動くイスラエル民族の心の表現」（p.23）

エドモンド・リーチ『聖書の構造分析』

アイザック・シャベラ「カインの罪」（1954・10 フレイザー記念講演）

古代ヘブライでは、殺人は私的犯罪。つまり国家ではなく、殺されたものの親族が、報復の責任を負う。親族殺害の場合はそれが不可能⇒直接「神の手」に委ねられることになる。p.35～36

D. アラン・エイコック ① 神はカインの捧げ物を退け、アベルのそれを受け容れる。 ② カインはアベルを捧げ物にすると、神はそれを受け容れる！

カインは最初の都市の建設者となる。P.9 p.231～242

山形孝夫『聖書の起源』 p.21～22

S. H. フック アベルの殺害は、耕作地を肥沃にするための祭儀的な行為で、アベルは生贄。カインの印は、バビロニアの聖なる逃亡司祭の印である。

（参考 並木浩一『旧約聖書における社会と人間』（教文館）リーチの敷衍 p.48～62）

B) カフカのカイン像

資料 1

カフカ宛のプロートの手紙（現存しない。カフカがフェリーチェ・パウアー宛ての手紙に引用）
「君は君の不幸の中で幸福なのだ。」（F 757 1917-10-16）

資料 2 プロート宛ての手紙（Br.181 1917-10-12）

「親愛なるマックス 僕はいつもいぶかしく思っていたのだが、君は「不幸の中で幸福な」というこの言葉を僕に対しても、他の人たちに対しても心の中に持ち歩いているみたいだが、しかもそれは事実の確認でも、遺憾の意でも、最悪の場合には警告でさえなく、非難としてなのだね。それが何を意味するか、君は知らないのだろうか？同時にもちろん「幸福の中の不幸」をも含み持っているこの底意とともにカインは印を押されたのだ。だれかが「不幸の中で幸福」であるとすれば、それはまず、彼が世界と歩調が合わなくなったことを意味する。さらにそれは彼にとってすべてが崩壊した、あるいはしつづつあること、いかなる声も屈折せずしてはもはや彼に届かないこと、従って彼はどの声にも従えないということを意味している。僕はそこまでひどいわげじゃない、これまでは少なくともそうではなかった。…」

資料 3 フェリーツェ・パウアーへの手紙（F 758 1917-10-16）

しかし「不幸の中で幸福」ということを彼（プロート）が確認したことは、僕のことを越えて、一種の同時代批判なのだ。僕は彼がそれをもうある論文に書いたかどうか知らない。しかし彼はそれをすでに長い間それを心の中で持ち歩いているのだ。確認であれ、遺憾の意であれ、最悪の場合には警告でさえあれ、彼がそれをどう思おうと、彼は正しいのでしょう。ただそれを告発、非難ととることだけは彼はしてはなりません。彼はよくそうしたがるのですが、「不幸の中で幸福」であることは、「幸福の中の不幸」を同時に意味しているのですが（たぶん前者のほうがより決定的なのでしょうが）、それはカインがそれとともに印を押されたその判決なのです。それは、彼が世界と歩調が合わなくなったことを意味します。この印を帯びているものは、世界を破壊し、しかも世界を生きた姿で再建できないで、世界の廃墟のあいだを駆り立てられるのです。彼はもちろん不幸ではありません。なぜなら不幸とは生きていてこそ問題になることで、この生を彼は除去した（この部分が『兄弟殺し』のモチーフになる）のですから。しかし彼は生を明晰すぎる眼で見るのですが、それはこの領域ではなにか不幸と似たことを意味するのです。

世界の破壊と自己破壊

私は書けなくなってしまった。だから自伝的な探求を計画している。自伝ではなく、できるだけ小さなもろもろの構成要素の探求と発見である。これらの構成要素から自分自身を構築しようというわけなのだが、それはまるで、自分の家がぐらついているので、その脇にしっかりとした家を、それもできるだけ古い家の部材をもちいて建てようとひとのようなものである。普請の最中に彼の力が尽きてしまえば、もちろんひどいことになる。確かにぐらついているが、しかし何もかもそろった家の代わりに、半分壊された家と半分出来た家を持つ、つまり何も持たないことになってしまうからだ。その結果は、狂気であり、それゆえ例えばふたつの家の間で、コサック・ダンスを踊るようなものだが、そのさいコサックは、長靴のかかたで地面を掻き、掘り返して、そのあげく自分の足下に自分の墓穴ができてしまうのである。(N II 373)

C) カフカ「兄弟殺し」 成立は1916年12月中旬～1917年1月中旬(DA354)

1) 下手人 シュマル (Schmar-otzer 寄食者)。

フェリーツェ・バウアー宛ての手紙

「私の内部でふたりの人間が闘っていたし、現在でも闘っています。……いまや二人は闘っていますが、それはそれぞれ二本の手がお互いに殴りかかる本当の闘いではありません。

一方は他方に依存しており、彼は内的な理由から決して他方を投げ倒すことはないでしょう。」(F617 1914-10月下旬から11月上旬)

2) 被害者、ヴェーゼは勤め人で妻帯者、オフィスからの帰りに殺害される。Wese は Wesen の n を欠いている。カフカは分裂した個人の全体を表すのに Wesen を用いている。(カフカはプロートの戯曲『エステル』に関し、「君の存在の三分割 Dreiteilung Deines Wesens が起きている」(Br 214 1917-12-18/19) Wese は n の欠落した Wesen である。

n は否定の n であり、この欠落した n がシュマルに分化され、形象化される。

シュマルにはなんのためらいも、良心の呵責もないように見える。ただ手放しの殺人の快楽が前面に出ている。陰惨な殺人の話なのに、それにまつわる陰湿がない。これは殺害の対象が他者であれば、ありえないこと

である。「なぜなら不幸とは生きていてこそ問題になることで、この生を彼は除去したのですから」(F 758 1917-10-16) 自分の生の刺殺、市民的自我の殺害、であるからこそ、かくも「ほがらかに」殺人は行われる。全体的にはむしろ「せいせいした」といった雰囲気が漂っている。殺人に対する正常な反応はわずかし描かれぬ。結末で、連行する警官の肩に口を押し付けることでかろうじて「吐き気」をこらえるシュマール。

フェリーツェ・パウアーへの手紙 F 756 1917-10-1

「私はこの病気を密かに結核とは考えないで、私の全面的破産と考えています。……血は肺から流れ出したのではなく、闘う人の決定的な突きに由来しているのです。」

(ただしシュマールの殺人が、結核そのものなのではない。むしろ身体の病(結核)が「精神の病が岸を溢れ出したもの」(Br 242 1918年7月 an Oskar Baum)なのだ。)

カフカが alter ego を表す隠喩は、「兄弟」(少年期のロマン) ⇒ 「知人」(『ある闘いの記述』 ⇒ 「友人」(『判決』)と変化する。従って「兄弟」も「友人」も隠喩としては、等価である。

「僕がかつてある長編小説を企てていたが、そこでは二人の兄弟が相争って、そのひとりとはアメリカに渡り、他方はヨーロッパの牢獄にいた。』『日記』 T 146 1911-1-19

「兄弟殺し」では、「カイン」(作家としての自己)は市民的自我を直接に加害する。

これは『判決』では「ロシアの友人」が「父」を経由してゲオルクに死刑を宣告するのと、著しい対照をなしている。(『判決』では父は「私は当地における彼(ロシアの友人)の代理人だ」という)。

4) パラスは『流刑地にて』の探検家と同じく、観察者 Aspektfigur であって、なおかつ審判者としての萌芽を秘めている。しかし「兄弟殺し」ではそれはあからさまになっていない。

「彼にはふたつの敵がいる。第一の敵は背後から、起源のほうから彼に迫る。第二の敵は、彼が前方へ行く道をふさぐ。彼は両方の敵と闘う。本来なら第二の敵との闘いでは第一の敵は彼を支えてくれるはずだ。なぜなら第一の敵は彼を前方に駆り立てるからだ。同様に第一の敵と闘いでは第二

の敵は彼を支えてくれるはずだ。なぜなら第二の敵は押し戻そうとするからだ。しかしこれは理論上そうなるだけの話である。なぜならふたつの敵がいるだけでなく、まだ彼自身がいるし、彼の意図を知るものなどいないからだ。ともかく見張られていない瞬間に戦線から抜け出して……、闘いの経験を生かして、闘い合う敵たちの審判官になることがかれの夢である。」
(T 851-2 1920-1-17)

私の「兄弟殺し」に関するテーゼ

シュマールとヴェーゼはともにカフカの内部の相争う二つの要素「作家としてのカフカ」と「市民としてのカフカ」を代理している。前者が後者を抹殺するのは、『判決』でゲオルクを死に追いやるのが、ロシアの友人であることの反復である。パラスは、自己観察の主体、フロイトの「超自我」であるがゆえに、「なにひとつ見逃さない」。パラスの審判者として機能は、シュマールがヴェーゼの抹殺を妨げないことに、わずかに現れている。

「兄弟殺し」に関する 文献と主要テーゼ

- 1962 **Richter**, Helmut: Franz Kafka — Werk und Entwurf. Rütten & Loening. 1962. S.151～154.
シュマールとヴェーゼは兄弟ではなく、友人。兄弟とは「人間みな兄弟」というシラー的な意味である。
パラスは「パラス・アテーネー」（戦争と平和における国家の守護女神）ゲーテの「プロメテウス」の引用の指摘（Nicht alle Blütenräume reiften.）
- 1963 **Dietz**, Ludwig: Franz Kafka — Drucke zu Lebzeiten. In: Jahrbuch der Schillergesellschaft, 7.Jg. 1963. S.416～457. bes. S.453～457
生前に出版された四つの版を比較。1918年にクルト・ヴォルフ社の「新しい文学」に掲載された「殺人」（Ein Mordが原題）の方が、1917年に雑誌「マルシアス」に載った「兄弟殺し」より逆に<若い原稿、未完成稿>であると推理。
- 1964 **Bezzel**, Christoph: Natur bei Kafka — Studien zur Ästhetik des poetischen Zeichens. Hans Karl, 1964. S.76～77。自然描写の記述のみで、特記すべきことなし。
- 1965 **Politzer**, Heinz: Franz Kafka, der Künstler. Fischer. 1965. S.147～149
「非人間化の過程の一例。人間はつまるところ非人間であるという事実がこの原不和の基底にある。」（殺人を単なる他者殺人としてしか見ていない。）独身

者シュマールの既婚の市民ヴェーゼに対する勝利。マリオネットによって演じられたメロドラマ。

- 1971 **Beck, Evelyn Torton:** *Kafka and the Yiddish Theater — its impact on his work* The University of Wisconsin Press. 1971. S.175~178.
ゴルディンの『野生の人』『シュヒテ(屠殺術を習う男)』の影響。『野生の人』のレメクは、「俺は温かい赤い血がお前の傷から流れるのを見たい。」と叫ぶ。ゴルディンの劇では殺人の動機が明示されているが、カフカの作品では明示されない。(差異) 根拠のない殺人。
- 1974 **Nagel, Bert:** *Franz Kafka — Aspekte zur Interpretation und Wertung.* Erich Schmidt. 1974. S.121, S.151. 特記すべきことなし。
- 1977 **Rajec, Elisabeth M.:** *Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafkas.* Peter Lang, 1977. S.86~90 Wese は Wesen 本質、Schmar は Schmar 「価値のないもの」。
- 1978 **Neuman, Gerhard:** *Die Arbeiten im Archimistengäßchen.* In *Kafka—Handbuch in zwei Bänden. Band 2,* Kröner, 1979. S.317~319 解釈の四つの可能性。①聖書のカインとアベル ②家族状況のエディプスの要約。幼くして死んだ兄弟(Georg, Heinrich)と母ユウリエに対するカフカの責罪感(ミッチャーリッヒ・ニールセン1977) ③非人間化した現在と古典的人間性の矛盾(リヒター) ④官僚的存在と公共性の批判に耐ええないアナーキスティックな存在へと自己分裂しているという幻想
- 1981 **Mitchell, Breon:** *Ghosts from the Dungeons of the World Within: Kafka's "Ein Brudermord"* In. *Monatshefte Vol.73, No.1,* 1981. p.51~62 この論文は一番優れている。
- 1985 **Triffitt, B. Gregory:** *Kafka's 'Landarzt' Collection — Rhetoric and Interpretation.* Peter Lang, 1985. S.179~184 多くはリヒターを下敷きにしている。
- 2002 **Bertram Rohde:** « und blatterte ein wenig in der Bibel » カフカは Bin Gorion の『ユダヤ伝説』の影響を受けた。独身者カインは妻帯者アベルを嫉妬して殺す。(極めて怪しい)

『兄弟殺し』に影響を与えた作品。

ミッチェルはカフカが影響を受けた作品が二つあると指摘する。

1981 Mitchell, Breon: Ghosts from the Dungeons of the World Within

Das jüdische Prag — Eine Sammelschrift mit Texten von Max Brod u.a. (1917, 実際は15. Dez.1916には出版されていた。Jüdische Selbstwehr ; Neuausgabe 1978)

0) フランツ・カフカ「ある夢」がS.32-33に掲載されている。

カフカは従ってこの本を確実に知っていたし、間違いなく読んでいます。

1) ルドルフ・フックス「墮罪」 S.34-35

フックスは聖書のカインとアベルの物語をこう変奏する。

世の中のことで変化を免れるものはないが、墮罪もそうである。家路につくカインとアベルの頭上に主なる神は「試練の雲」となってわだかまっている。この神は、ゼウスのように雨になって、ただし人間の雨となって、地上に降り注ぐ。現代のカインとアベルはこれらの降ってきた人間たちに、マントに広げた自分たちの商品を売る。人々はアベルの売る肉に群がって、カインの売る野で採れた果物を「日々の糧」と呼ぶ。ルドルフ・フックスは二人に差異を設ける 役を、神の手から、彼が変身した群集に移行させる。 傷ついたカインはアベルを殺す。「二人が立ち上がったとき、まだ十分暗くはなかったので、兄のアベルの頬に浮かぶ嬉しげな紅潮をカインは見逃さなかった—そこでカインはアベルを打ち殺した。」(S.35)これが現代の「墮罪」の物語である。

2) ヘルベルト・フォン・フックス

「我らが日々の地獄行き」 Unsere tägliche Höllenfahrt S.14-16

「我ら自我に罪を犯すもの」 私たちは内に向かう犯罪者、自我に罪を犯すものだ。(S.15)

「拷問部屋」 隣人に罪を犯すものは、法で罰される。自我に罪を犯すものは、自我に苦しむことで懲らしめられる。生の嘘 (Lebenslüge) は、彼をふたつの部分に引き裂き、これらの部分はブルドッグのようにお互いに敵意に満ちて飛びかかろうとする。(S.15)

「贖罪の生け贄」 生の嘘は私たちのなかに食い入ってきて、その根を引き抜こうとするものは、我とわが血を浴びる。

自我の罪 (Ichsünde) を病むものは、彼の自我の感染した部分を容赦なく切り取ることでしか癒されない。

しかし内部の真実に帰るには、この血の犠牲、自らの血の

犠牲しか道はないのだ。(S.16)

カフカのグレーテ・ブロッホへの手紙 (1913-11-18 F 477)

出来るだけ苦痛を強めようという気持ちがあなたにはありませんか？本能の弱い人間にとっては、それは苦痛を追い払う唯一の可能性です。あらゆるよい本能に見放された医学がそうするように、傷ついた箇所を焼き切るのです。

半ば銃剣、半ば包丁 (この「半ばA, 半ばB」というのが1916~7年の特徴的表現)

「雑種」(Eine Kreuzung) では、半ば猫、半ば羊。「新しい弁護士」のブッケファルスはアレクサンダー大王の軍馬で、いまは弁護士。「家長の気懸かり」のオドラデクは糸巻きなのに、話す。「ある学会報告」のペーターは「猿としての前歴」を持っている。1912年から14年にかけては、分析的に別々の人物に負わせていた自己分裂を一挙に示そうとする新しい傾向。

『日記』 1921-10-19 T.867

生を生きた姿で完成できなかったものは、片方の手を自分の運命に対する絶望をすこし防ぐ (これははなはだ不完全にしかできないが) ために必要とする。しかしもう一方の手で彼は廢墟のなかに見るものを書き込むことができる、なぜなら彼は他の人たちとは違った風に、またより多くを見るからである。彼はだって存命中に死んでいて、本来の生き残りなのだ。そのさい絶望との闘いのために両手と、彼がもっている以上の手を必要としないという前提のもとにはあるが。

(参考)

カフカの手紙 Mitte September 1917 an Brod (Br.161)

ときおり私には、私の知らないうちに脳と肺が示し合わせていたかのように思われる。脳が「もうこれ以上はだめだ」と言ったので、五年後に肺が「それじゃあ助けてあげよう」と宣言したのだ。